

リンチノとモンゴル革命

二 木 博 史

- 1 はじめに
- 2 シベリア時代
- 3 1921年革命の指導
- 4 人民共和国の成立まで
- 5 リンチノの退場
- 6 おわりに

1 はじめに

1930年代の初めに出国し、日本の保護下に内モンゴルにとどまり、第2次大戦後にアメリカへ亡命した、西部モンゴルの有力な活仏ディレブ=ホトクト（ディロワ=ホトクト）は、その回想の中で「当時 [1921年末頃] 党と政府のすべての活動を、リンチノフまたはエレベグドルジとよばれたブリヤート人が指導していた」と述べている¹⁾。

この証言が、かなり真実に近いであろうことは、本稿の中で明らかになる。

エルベグドルジ=リンチノ（1888～1938年）が、1920～1925年のモンゴル史の中で果たした役割の評価は、まだ完全には定まっていない。数年前までリンチノに関する情報は、非常に少なかった。リンチノが強い影響力をもっていたことについて、民主化以前のモンゴルの“公式的歴史”は、きわめてあいまいにしか述べていなかった。モンゴル科学アカデミー歴史研究所編の『モンゴル史』にリンチノの名前が登場するのは、わずか一箇所にすぎない。すなわち「[1920年夏にウェルフネウディンスクに到着した] 革命グループの代表は、かつて首都フレーで学校教師をしていたジャムツァラーノと、E.リンチノを通訳に任命するようシュミヤツキーに要請した。この要請に従い、両名は代表団の通訳となり、革命の過程で、また革命勝利後もモンゴルの政治・文化の諸機関で積極的に活動した²⁾」。

リンチノのこのような扱いは、彼が1930年代後半に肅清され、長い間「スパイ」「反革命」などの烙印を押されていたことと関係がある。

「歴史の見直し」の中で、“スフバートル神話”がくずれ始め、ボドーとダンザンに対する正しい評価が定着するのと並行して、リンチノを“スケープゴート”にしたてる奇妙な現象がおこっている。「人民革命の最高指導者スフバートル」の路線からはずれ、反革命の道を歩んだとされてきたボドーとダンザンの名譽が回復されると、2人の肅清はロシアがやらせたもので、

その実行者はリンチノだという、極端な解釈が生まれ、それが現在のモンゴルでは広く受け入れられている。これまでボドーとダンザンがおわされてきた「負の役割」を今やリンチノが1人で背負いこむことになった。

他方、ロシアのブリヤートでは、ブリヤート＝モンゴル人に自治をもたらした最大の功労者としてのリンチノに対する評価は、1980年代末以降、急激に高まり、1993年には生誕105周年の記念シンポジウムがウランウデで開かれ、1994年には論文集も刊行された。ただ、ブリヤートにおけるリンチノ研究は、リンチノのシベリア時代に重点がおかれていて、モンゴル時代に関しては関心が低い。

比喩的にいえば、リンチノは1921年のモンゴル革命の“設計者”の1人であり、モンゴル人民共和国はリンチノの“作品”である。つまり現在のモンゴルの原型をつくったのはリンチノだといっても過言ではない。この意味において、リンチノは革命のハルハ＝モンゴル側の指導者、ボドーやダンザンよりも重要な役割を果たしたとさえいえると、私は考えている。

リンチノのこのような位置付けは、これまでのモンゴル現代史研究のなかでは、まったくなされてこなかった³⁾。彼の思想と行動を完全に理解するには、モンゴル時代以前の活動やモンゴルを離れたあとの軌跡も把握しておく必要がある。そこで本稿では、リンチノのモンゴル時代を中心に、その生涯を追うことにした。

本稿で用いた資料の多くは、ウランバートルやウランウデで入手したもので、一部は未刊行資料である。

2 シベリア時代

エルベグドルジ＝リンチノは、1888年にバイカル湖の東岸のバルグジン地方で、中層の牧民の家に生まれた。10代から非合法活動に参加し、ロシア第一革命後の1906年にはウェルフネウディンスクでポリシェヴィキ系の社会民主労働党の組織に加わった。この頃、シベリアの著名なポリシェヴィキ指導者シュミヤツキーのもとで、非合法の新聞の発行などをてつだった⁴⁾。

リンチノが後にコミンテルン極東書記局長シュミヤツキーのもとで、モンゴル＝チベット部長として活動したのは、この時期の行動と無関係ではないだろう。

彼は1907年、学生スト参加の理由で、トロイツコサフスクの実科学校から退学処分をうけた。この年の末には、1905年革命の評価、農民の役割、民族問題などでの意見の違いから社会民主労働党をぬけた⁵⁾。

トムスク時代(1907～1908年)はリンチノのその後の活動に大きな影響を与えたと思われる。ここで彼はシベリア自治運動の指導者ポターニンと知り合っただけでなく、一ヶ月間の獄中生活も体験する⁶⁾。

リンチノは1908年の秋にサクト=ペテルブルク大学の法学部に入学した。在学中(1908~1914年)、彼はさまざまな反体制運動に参加したが、とりわけシベリア自治運動に積極的に関わった。後に彼が1918年1月に樹立された「自治シベリア臨時政府」の教育大臣に任命されたのは⁷⁾、トムスクやサクト=ペテルブルクでの活動と関係があるだろう。

当時のブリヤートの他の知識人と同様、リンチノの活動は政治運動にとどまらず、広い領域におよんでいた。その代表的な例として、アグワン=ドルジェフの考案した「ワギンドラ文字」をN.アマガエフと協力としてさらに改良し、1910年にサクト=ペテルブルクで出版したことが、あげられよう。そのほか、『ゲセル物語』などフォークロアのテキストを採集したことも知られている⁸⁾。

これらの文化啓蒙的活動は、リンチノのブリヤート=モンゴル人としての強い自覚と結びついており、彼の思想を考えるうえでも見のがせない。

啓蒙活動を積極的におこなったブリヤート=モンゴル人としては、ツェウェーン=ジャムツァラーノが思いうかぶが、リンチノの活動はジャムツァラーノの行動と多くの共通点をもつ。翻訳による啓蒙活動を例にとれば、ジャムツァラーノがレフ=トルストイの『仏陀の生涯』をモンゴル語に訳したのと同じ時期に、リンチノはやはりトルストイ作『アッシリア王アッサルハードン』をバルグジン=ダツァンのチョルジ=ラマのツイジポフと共訳し、イヘフレーで出版している⁹⁾。

リンチノのモンゴルとの関わりは、1915~1916年にコーズィンやウィツテの指揮する調査隊に参加したときに始まる。このときモンゴル各地を訪れてえた知識に基づき「モンゴルの経済地域」「モンゴルのシャマニズム」などを書いたという¹⁰⁾。1921年からモンゴルで活動をはじめたとき、1910年代半ばの経験が大いに役に立ったと想像される。

1917年の2月革命後、シベリアのブリヤート=モンゴル人の間でもさまざまな運動がおこった。4月のチタの大会でイルクーツク県とザバイカル州のブリヤート=モンゴル人を統合した「ブリヤート民族委員会」が設立され、リンチノが書記に就任する。この組織の目的は、ブリヤート=モンゴル人の自決と自治を実現させることであった。7月のグシノオゼルスキー=ダツァンでの大会で、リンチノはボグダノフと共に、憲法制定会議の代議員候補に選ばれた¹¹⁾。

1918年の8月、リンチノはヤンソンとともにキャフタへ赴いたが、日本軍を中心とするシベリア干渉という新事態の発生のため、それ以上はすすまず、引き返した¹²⁾。

リンチノは1917年から1919年までエスエル(社会革命党)のマクシマリスト派に属したが、ポリシェヴィキとも協力関係にあった。彼は白軍勢力の中にとりのこされたポリシェヴィキのヤンソンやヤキーモフの脱出を助けた¹³⁾。

リンチノは1921年革命後にモンゴル人が「ロシアの2人の恩人」¹⁴⁾とよんだシュミヤツキーと

ヤンソンのいずれとも個人的な関係で結ばれていた。このことは、彼がモンゴル革命の中で指導的役割を果たしたこともふかい関係があると思われる。

日本の支援、セミョーノフの力を背景に、内モンゴルのネイチ＝トインらを中心に、1919年の2月から約1年間つづいた「大モンゴル国」運動へのリンチノの参加は、彼に対する批判のもっとも大きな根拠となってきた。「大モンゴル国」とリンチノの関係は、それ自体大きなテーマであり、詳細は別稿にゆずらなければならない。ただ結論の一部を先に述べるならば、白軍と干涉軍に包囲された複雑な政治状況のもとで、ブリヤート＝モンゴル人の利益を守るために、ヤンソンらボリシェヴィキの了解のもとに、もう一つの“プレスト講和”としてセミョーノフと同盟した¹⁵⁾、というリンチノの弁明は、根拠があると私は考えている。

3 1921年革命の指導

リンチノのヤンソンに対する提言の結果、1920年春、イルクーツクに対モンゴル活動の組織「アジア局」が作られたことについては、拙稿（1994年）ですでに述べた¹⁶⁾。

アジア局は、ボリソフとツェデンイシを通じて、モンゴルの革命家とつながりをもった。リンチノによれば、2人とも彼がアジア局に迎え入れた活動家である¹⁷⁾。両名は消費組合中央連合の職員の肩書でモンゴルを訪れた¹⁸⁾。

2人のフレール訪問がモンゴル人民党のその後の活動のうえで、たいへん重要な意味をもったことは、「ドクソムの回想」から確認される。同回想によれば、両名はダンザンとチョイバルサンの出発（1920年6月29日）のあと、フレールに到着した。トーラ河での集まりには、人民党の全メンバーが集まり、ソビエト＝ロシアとの関係確立について、論議がなされた。この会議のときに、ダンザンとチョイバルサンに続く後続の5名（ボドー、チャグダルジャブ、ドクソム、スフバートル、ロソル）のロシア派遣が決められた¹⁹⁾。

上で述べたことからわかるように、当時リンチノは積極的に対モンゴル活動を推進し始めていた。したがって、リンチノがモンゴル人たちの要請に基づき、ジャムツァラーノとともにウエルフネウディンスクでダンザンとチョイバルサンに合流したという、『発端と成就』に基づく記述は、誤りではないが、不適當である。

リンチノによれば、ウエルフネウディンスクでモンゴル人から革命運動の話をきいたシュミヤツキーとジャムツァラーノは、その進展についてきわめて懐疑的だった。リンチノは2人を批判すると同時に、極東共和国では何も解決できないので、イルクーツク、オムスクへ行くべきだと主張したという²⁰⁾。

イルクーツクでもボリシェヴィキたちは、長い時間をかけてモンゴル代表団の意図を探った。そのあと、代表団はオムスクを経てモスクワへ向った。このときのメンバーは、モンゴル人2

名（ダンザン、チャグダルジャブ）、ブリヤート＝モンゴル人2名（リンチノ、ジャムバロン）である²¹⁾。

モスクワでの代表団の主要な交渉相手は外務人民委員代理カラハンであった。話し合いの具体的内容は明らかでないが、ロシア側はモンゴルへの援助に原則的に同意した。中国と朝鮮に対する活動資金としてシュミヤツキーに与えられた30万ルーブルのうち、8万ルーブルが対モンゴル活動の資金として使えることになった²²⁾。

リンチノのモスクワ行には、モンゴル代表団への協力とは別に、ブリヤート＝モンゴル人の自治の獲得という大目的があった。

1920年10月13日、レーニン、スターリン、ブハーリンらから構成されるロシア共産党中央委政治局会議で、モンゴル問題やブリヤート問題が検討されたとき、リンチノもアグワン＝ドルジエフやルィスクロフらとともに同会議に出席し、意見を述べた。翌10月14日に、ブリヤート＝モンゴル人にとっては歴史的な、カルムィク人とブリヤート人の自治を認める政治局決議が出された²³⁾。

このように、リンチノのモスクワでの活動は、たいへん実り多いものであった。

リンチノらは同年11月、イルクーツクへ戻った。11月10日付のカラハンあて書簡には「モンゴル人民党特別代表団長ダンザン、副団長兼顧問リンチノ」という表現がみられる²⁴⁾。

翌1921年1月、イルクーツクにコミンテルン極東書記局が組織され、リンチノはモンゴル＝チベット部の部長に就任する。2月初めに白軍のウンゲルンがフレーを占領すると、対ウンゲルン軍の戦略がモンゴル人民党の最大の課題になった。

当初赤軍第5軍は、ウンゲルン軍がロシア領に入るのをまち、歩兵部隊で迎えうつ作戦を考えていた。これに対しリンチノは、モンゴル領内に進軍して重要な拠点をおさえること、騎馬部隊を組織することを提案した。この提案に基づき、シェティンキンの騎馬部隊が編成された²⁵⁾。

3月13日にトロイツコサフスクにモンゴル臨時人民政府が樹立され、同18日にはモンゴル義勇軍がキャフタの中国軍を攻撃して町を占領し、ここに臨時政府が移動してくる。

リンチノは4月にイルクーツクを離れ、モンゴル領内に入る。彼は後に、コミンテルンの極東書記局から派遣され、モンゴルへ行ったと書いている²⁶⁾。

臨時政府の4月3日の決議は「イルクーツク駐在のわが党の全権代表ボロダエフスキー [=リンチノ] を[政府顧問に] 任命する」と述べている²⁷⁾。この表現は、リンチノがイルクーツクでモンゴル人民党を代表してソビエト＝ロシアとの交渉にあたっていたことを示している。

ウンゲルン軍は、いったんソビエト＝ロシア領、極東共和国領に入ったあと、赤軍に撃退され、再びモンゴル領内に引きかえした。

6月末、ウンゲルンの本隊がユルー河方面にあり、再編成後、オルホン河をわたって西方へ向おうとしているという情報もたらされた。このあと軍事ソヴェートが組織され、そのメンバーには、スフバートル、リトヴィンツェフ、ブカトフ、リンチノの4名が選ばれた²⁸⁾。

1921年7月の下旬、モンゴル人民義勇軍とソビエト赤軍は、ウンゲルン軍が退去したあとのプレーへ進軍し、7月10日には新政府が樹立される。

リンチノの対ウンゲルン軍戦に対する貢献の大きさは、1922年2月に、スフバートル、ハタンバートル＝マクサルジャブ、チョイバルサンとともにロシア赤旗勲章を授与されていることから推しはかることができる²⁹⁾。

4 人民共和国の成立まで

リンチノは1921年9月に全軍評議会議長に就任し、25年に出国するまでその地位にとどまった。全軍評議会は、ソビエト＝ロシアの軍事革命会議を模倣したものと思われる。となると、リンチノの立場は、軍事革命会議議長トロツキーの地位に比せられることになる³⁰⁾。

全軍評議会議長は、機構のうえでは、国防大臣や全軍司令官を指導する立場にあった。したがってスフバートル（1923年2月の死まで全軍司令官、1922年12月まで国防大臣兼任）やハタンバートル＝マクサルジャブ（1922年12月から1927年9月まで国防大臣）はリンチノの指揮下にあった。

スフバートルを「モンゴル人民党の創始者」「人民革命の最高指導者」とする“スフバートル神話”はくずれ、「軍の最高指導者としてのスフバートル像」が、かろうじて“スフバートル崇拜”をささえているが、実際には、全軍評議会の設置後、スフバートルは軍の最高指導者としての地位を失っている。スフバートルが本当の意味で軍に君臨したのは、1921年の3月から9月までの半年間にすぎない。

1922年7月に設けられた「内務保安局」（1936年2月に内務省に昇格）は、全軍評議会議長の管轄下にあった。リンチノを攻撃する者は、彼がこの組織を使って前首相ボドーや前党首ダンザンの粛清を実行したと主張してきた。

1921年7月に新政府の首相に任命されたボドーは、翌22年1月にはその職を退き、8月の下旬に内務保安局に逮捕され、同月末に処刑された。

ボドーが1921年革命で果たした役割とその生涯については別稿で扱う予定なので、ここではリンチノとの関係にしぼって簡単にみておくことにする。

1921年秋の段階で、モンゴル人民党の指導者は、リンチノ、スフバートルのグループとボドー、チャグダルジャブのグループに分かれ、対立していたという証言がある。同証言によれば、リンチノらは「人民の権利をまもり、革命の思想をひろめる」路線をとり、ボドーらは「外

国の支配から脱し、ボグドを即位させ、立憲君主制の国をつくり、目的は果したので、これ以上革命を積極的にすすめる必要はない」と考えていた³¹⁾。

S.ダンザン、スフバートル、ツェレンドルジらはソビエト＝ロシアとの外交交渉へ、ロソルとA.ダンザンは極東勤労者大会に出席するため、それぞれモスクワへ向ったあと、リンチノとボドーの対立はいつそうはげしくなった。リンチノはソビエト＝ロシア代表オブティンやコミンテルン代表スタルコフと協力しつつ、青年層を味方にひきいれ、自派の力を強くしようとした³²⁾。

はじめは中立の立場をとっていたS.ダンザンが、はっきりと反ボドーの立場に立つようになったのは、ボドーがダンザンの共和制志向の考え方をきらい、ダンザンを打倒しようとしたからだという³³⁾。

ボドーの辞任とその逮捕についての詳細ははぶくが、訊問の記録を分析すると、ダンザンが積極的に関与していたことがわかる³⁴⁾。

ボドー首相の後任に仏教界の中心人物の一人ジャルハンズ＝ホトクト（在職、1922年3月～1923年6月）が選ばれたのは、旧体制の者の力を利用するという、リンチノの考え方と関係がある³⁵⁾。

ジャルハンズ＝ホトクトの死後、党中央委幹部会と青年同盟中央委幹部会の合同の会議が開かれ、すでに旧勢力の力は失われたという認識のもとに、人民の側の者を選ぶという方針が出され、候補者としてS.ダンザンとツェレンドルジの名前があがった。革命の指導者の中から選ぶとすればダンザン、経験豊かな官吏の中から任命するとすればツェレンドルジが適任ということになった³⁶⁾。

当時リンチノはモスクワに出張中で、指導者の中でただ一人不在だった。党委員長のA.ダンザン（ヤボン＝ダンザン）が「党の重要な指導者の一人」リンチノの意見を求めようと発言し、モスクワへ電報が送られた。リンチノは返電の中で、首相候補者としてタラバ＝バンディダとマンズシリ＝ホトクトの2人の高僧の名前をあげた³⁷⁾。前者は人民党に加わった僧侶として著名で、後者は1930年代に粛清の犠牲になった。

リンチノがこの段階でも旧体制の者を首相に起用しようとしたことは、彼の現実主義的な考え方の一つのあらわれとみることができよう。

結局、首相の選出はリンチノの帰国をまって最終的にきめることになった。このあとのツェレンドルジ（在職、1923年9月～1928年2月）選出までの経過は、現在のところ不明である。

ここでリンチノの党内における地位をみておくことにする。

モンゴル人民党中央委に正式に幹部会が設けられたのは1922年で、幹部会の最初の会議は同年2月に開かれた。当時の幹部会の構成員は不明だが、リンチノは間違いなく加わっていたと

思われる。1年後の1923年2月の段階で、幹部会員はS.ダンザン、ババーサン、A.ダンザン、ツェレンドルジ、リンチノの5名だった³⁸⁾。

この頃、幹部会員5名、幹部会員候補5名、中央委員10名、中央委員候補10名の計30名から成る党指導部が形成され、党の機構がととのえられた。

第2回党大会(1923年7～8月)では幹部会員7名が任命された。すなわちA.ダンザン(党委員長)、ダムバドルジ、リンチノ、ツェレンドルジ、S.ダンザン、ナツァグドルジ、ボヤンネメフである³⁹⁾。

次にリンチノの政府内での地位について検討する。リンチノは全軍評議会議長として軍を掌握していただけでなく、政府顧問という肩書も有していた。

政府内の「政府顧問」の地位は、政府の決裁文書における署名の位置が参考になる。モンゴル歴史中央文書館(ウランバートル)の資料をしらべたところ、1924年2月の文書では、「顧問エルベグドルジ」の署名は、「首相ツェレンドルジ」「副首相ダンザン」の次にきている⁴⁰⁾。したがってリンチノの政府内での地位は、首相、副首相に次ぐものであったとみてよいだろう。

国王の死去(1924年5月)のあと開かれた第3回党大会(同年8～9月)では、リンチノとS.ダンザンの間で権力闘争がくりひろげられ、リンチノの勝利でおわる。

両者の力関係を整理すると、軍においては全軍評議会議長リンチノが全軍司令官ダンザン(スフバートルの死後就任)を指揮する立場にあり、政府内の序列は副首相ダンザンが政府顧問リンチノより上であった。党内での2人の力は、ほぼ互角だったと思われる。総合的にみると、両者の実力はきわめて接近していたといえるだろう。

2人の衝突の背景には政治路線の違い、党と青年同盟の対立、ハルハ＝モンゴル人とブリヤート＝モンゴル人の不和など複雑な問題があるが、詳細については別稿を用意しているので、ここでは深く立ち入らないことにする。

第3回党大会は、モンゴルの党史のうえでは、モンゴルの「非資本主義的発展の道」を決めたという位置づけをされてきたが、実際の決議は、それほど非資本主義的路線を強調しているわけではない。党中央委の報告に関する決議が「モンゴル国は世界の他の国々のように暴虐な資本家の抑圧をうけることなしに、国際情勢に応じて、民主的制度に依拠してすすむべきである」(第15項)、「わが党が依拠するのは、中層や下層の者たちだけである」(第17項)などとうたっている程度である⁴¹⁾。

これに対して、リンチノが党大会の時期に配布した小冊子『モンゴル革命の将来』は、「わが党の最終的目的は共産主義である」「わがモンゴルは、世界の他の国々のように資本家の抑圧をうけることなしに、直接、人民ソビエト制度を志向するならば、その過程における困難、問題を予め研究しておくべきだ」などの、より直接的な表現を多く含んでいた⁴²⁾。

党大会のあとに召集された第1回国家大議会（1924年11月）は、憲法を制定してモンゴル人民共和国を誕生させた。憲法の起草委員会は、首相ツェレンドルジ、ジャムツァラーノ、リンチノ、ゴンボバダムジャブの4人から構成されていた。同憲法は、1918年のロシア憲法や1923年のソ連憲法をモデルに作られた。

憲法成立直後、リンチノは、3年前にアルタンボラグからフレーを目指して進軍したとき、これほど早く目標を達成できるとは思ってもいなかったと、感激しつつ語った⁴³⁾。

第1回国家大議会は、小議会メンバーを選出して11月28日に閉会した。この日の午後、モンゴル式の祝宴が始まり、民謡がうたわれた。この宴のときに、リンチノの朝鮮人の妻マリヤ＝ニキーフォロヴナ＝ナムは、リンチノ自身がモンゴル語に訳した「インターナショナル」をうたったという⁴⁴⁾。

5 リンチノの退場

リンチノは1925年にソ連へ移り、モンゴルでの活動を基本的小おえる。

彼がソ連へ出国した直接的原因は、コミンテルン代表ルィスクロフとの対立である。コミンテルン執行委員会から派遣された、著名なキルギス人革命家ルィスクロフは、1924年10月6日にフレーに到着した。第一回国家大議会（11月8日～28日）で積極的に発言しただけでなく、『ノーヴィー＝ヴォストーク』誌にロシア語で会議の内容を記録している⁴⁵⁾。

リンチノがロシア共産党書記長スターリンと外務人民委員チチュエリンにあてた書簡（1925年1月）によれば、両者の対立は、憲法草案を審議する過程ですでに生じた。ルィスクロフは「モンゴルは外交政策の面でコミンテルンの指示に従う」という表現を憲法に盛りこむべきだと主張し、モンゴル側の強い反発を招いた⁴⁶⁾。ルィスクロフのこのときの主張は結局、通らなかったが、コミンテルンの名のもとに、モンゴルの実情を無視して急進的な政策を強引に実行しようとした彼のやり方は、リンチノとことごとく対立した。

同書簡の中の「基本的・原則的問題に関しても、コミンテルンはわれわれの考えに耳を傾けるべきである。なぜならわれわれはこの国の状況をよりよく知っているのだから」という表現は、リンチノのコミンテルンに対する考え方をよく示している。彼はコミンテルンの助言を尊重しつつも、それに盲従しようとはしなかった。

リンチノとコミンテルンの関係は複雑である。形式的には彼がかつてイルクーツクの極東書記局からシュミヤツキーの指示をうけてモンゴルに派遣されたのは事実で、彼は第3回党大会でのダンザンの弾劾の場合のように、きわめて重要な局面では、これを一つの切札として用いた⁴⁷⁾。スターリン／チチュエリンあての書簡でも、リンチノは極東書記局の委託を強調すると同時に、モンゴルは完全な民主主義国家を志向すべきだという、シュミヤツキーの指示を自己の

主張の根拠としている⁴⁸⁾。

シュミヤツキーは1922年春に外交官としてテヘランへ赴き、同年からモスクワの東方部が、モンゴルを管轄するコミンテルンの組織として機能し始める。この頃からリンチノとコミンテルンの関係は、あまり明確ではなくなる。ルィスクロフの到着以前にモンゴルでコミンテルンを代表していたのは、リンチノではなくスタルコフである⁴⁹⁾。要するにシュミヤツキーから派遣されたときは、リンチノはコミンテルン代表としての身分を有していたが、まもなくコミンテルンとの関係はあいまいになったとみてよいと思われる。つまりリンチノにはコミンテルンというしる楯は、事実上ないに等しかったといってよいだろう。

1925年1月6日の党中央委幹部会での、国営商業機関の設立をめぐる意見の対立は、リンチノとルィスクロフの関係をさらに悪化させた。スターリン／チチェーリンへの書簡は、この直後に書かれたようだ。幹部会は5対3で、ルィスクロフの提案を否決した⁵⁰⁾。このときルィスクロフは、党中央委の中に“反コミンテルン集団”が形成されている、という暴言をはいたという⁵¹⁾。反対の5票の内訳は明記されていないが、リンチノの外には、ルィスクロフが「リンチノ派」とよんだ5名（ジャダムバ、チョイバルサン、ジャミヤン、ツェレンドルジ、アマル）のうちの4名が入っていたとみてよいだろう。賛成した3人のうち、1人は党委員長ダムバドルジである。他の2人は、おそらくゲレクセンゲとハヤンヒルワーであろう。

スターリン／チチェーリンあて書簡の中で、リンチノは、ダムバドルジの態度を日和見主義的だと強く非難している⁵²⁾。第3回党大会当時はS.ダンザンに対して共闘した2人が、この時期にはむしろ対立していたことがわかる。リンチノによれば、スタルコフがボヤンネメフの支持によってのみ活動しえたのと同様に、ルィスクロフはダムバドルジのうしろ楯によってのみ、その地位を保っていた⁵³⁾。

同年3月の党中央委総会は、2人の対立をさらに決定的なものにした。総会議事録によれば、2人は党綱領や党とコミンテルンの関係に関して意見が対立した⁵⁴⁾。ナーツォフがこの中央委総会について書いた論文によれば、パンモンゴリズムに関する議論も重要な争点になった。特に1919年の「大モンゴル国」の性格をめぐる論争がなされたようだ⁵⁵⁾。

リンチノのパンモンゴリズムは後に非難されるようになるが、その主張がなされたのは、おそらくこの中央委総会においてであると思われる⁵⁶⁾。ダムバドルジの1926年1月のコミンテルンでの報告によれば、リンチノは全モンゴル人の統一を強く主張し、国防大臣ハタンバートル＝マクサルジャブは、リンチノを完全に支持していた⁵⁷⁾。

1925年6月15日の党中央委幹部会第33回会議は、リンチノとルィスクロフの対立が、中央委の分裂をも引きおこしかねない状況を生みだしていることを指摘したうえで、次のように決議した。

「[ルィスクロフは] 上部機関から派遣されてきた代表ではあるが、同機関の指導を実行する際に、モンゴル人の状況、党の立場をまったく考慮してこなかった。このような事情をコミンテルンに通告し、判断をおおぐことにし、他の代表の派遣をまつ。エルベグドルジ [=リンチノ] は、人民党を最初に作ったとき以来、党の中心になって活動してきたが、ルィスクロフとこのように対立する要因も作った。コミンテルンの極東書記局代表でもあるので、ルィスクロフと一緒に行かせ、この件について報告させる」⁵⁸⁾

決議を文字通り解釈すれば、リンチノのモスクワ行は単に事情説明のためであって、ソ連への追放を意味するものではない。

ただリンチノをモスクワへ送るという考え方は、首相ツェレンドルジには早くからあったようだ。彼の1924年8月23日の日記には、「ソ連大使がきて、リンチノをモスクワに行かせる件について、今日の会議で決めるのは待ってほしいというので了承」と書かれている⁵⁹⁾。前任のワシーリエフ大使が新任のニキーフォロフ大使に「ツェレンドルジはリンチノをモンゴルから遠ざけるよう要求したことがある」と語っているのは⁶⁰⁾、おそらくこの時のことを指しているのだと思われる。

首相との関係の悪化もリンチノのモンゴル出国の一つの要因になったとみてよいであろう。

1925年7月10日の党中央委幹部会第39回会議では、ソ連大使ワシーリエフとコミンテルンの対中国活動の指導者ヴォイティンスキーも交じえて、再び2人の処遇が協議された。決議によれば、ヴォイティンスキーの提案に基づき、リンチノの「他の公務」を解くこと、ルィスクロフの代りにアマガエフを臨時にコミンテルン代表に任命することが決められた⁶¹⁾。リンチノの「他の公務」という表現は明確ではないが、全軍評議会議長以外の公務を指すと一応考えておくことにする。

1925年9月末から10月初にかけて開かれたモンゴル人民革命党第4回大会の議事録は、国家小議会議長ゲンデンと首相ツェレンドルジの「エルベグドルジは現在、一時的にモスクワへ行っている」という発言を記録している⁶²⁾。したがって9月の段階で、リンチノはモンゴルにいなかったことが確認される。文書資料の分析からみて、リンチノは7月末頃に出国したのではないかと推定される⁶³⁾。

リンチノは1935年に作成した履歴書に1925年11月にソ連へ出国したと書いている⁶⁴⁾。モンゴル側の研究でも、彼は1925年11月まで全軍評議会議長の地位にあり、後任のジャグムバは同年11月19日に任命されたとなっている⁶⁵⁾。しかしリンチノが11月までにモンゴルへ戻ったのかどうかは確認できない。

1926年1月にコミンテルンでモンゴル問題が検討された際、ルィスクロフは「リンチノはモスクワへ来てからも、モンゴルへ戻る考えをすてていないだけでなく、自らをモンゴルの指導

者と考えている」と述べ、さらに「リンチノをモンゴル大使館にとどめるかどうか検討すべきだ」と提起している⁶⁶⁾。これらの発言から、1926年初めには、リンチノはモスクワのモンゴル大使館に住み、モンゴルに戻るチャンスをうかがっていたらしいことがわかる。しかし結局、その機会は訪れなかった。同年1月23日のコミンテルン東方部の決議は「同志リンチノを今後モンゴル問題に関与させないようにすべきである」と述べていた⁶⁷⁾。

モスクワに居を定めたリンチノは、1926～1930年に赤色教授研究所で学んだ。1927年からクルトヴェ（東方勤労者共産主義大学）で教え始め⁶⁸⁾、1937年7月に逮捕されたときには、同大学の教授だった。翌38年6月4日に「日本のスパイ」として死刑判決をうけ同月28日に執行された⁶⁹⁾。死後、1957年にソ連で名誉回復の措置がとられた。

6 おわりに

リンチノはヤンソンに働きかけアジア局を作ることによって1921年の革命を準備し、ダンザンのモスクワ行に同行したり、対ウングェルン軍作戦を指導したりすることにより革命を勝利に導き（1921年7月に新政府樹立）、憲法制定、人民共和国建国（1924年11月）によって革命を仕上げた。

1921年のモンゴル革命は、1911年の革命同様、単に外モンゴルにとどまらず、すべてのモンゴル人地域を統合したモンゴル人の国家を作ることをその目標としていた。1911年革命がハルハ＝モンゴル人と内モンゴル人の共同作戦とすれば、1921年革命はハルハ＝モンゴル人とブリヤート＝モンゴル人の共同事業として進行した。1911年の運動では、ハイサンが内モンゴルを代表する形で、重要な役割を果たした。1921年の場合は、単純に図式化すれば、リンチノがその役割をになったとってよいであろう。

このような意味で、リンチノは疑いもなく、ダンザンやボドーと並んで、1921年革命の最高指導者のひとりである。

ダンザンやボドーがモンゴルの独立のみを目指していたのに対し、リンチノはモンゴル、シベリア、中央アジア、中国の抑圧された諸民族の解放を常に考えていた。この点において、彼の思想と行動のスケールは、他のモンゴルの指導者たちとは比較にならないほど大きかった。

帝政ロシアで最高の教育をうけ、20年以上の革命家としての経歴をもち、ブリヤートの共産主義者の多くを自分の弟子と自負するリンチノのような存在は⁷⁰⁾、モンゴルの他の指導者からみれば、完全に異質のものであり、彼の孤立は、最初から運命づけられていたともいえる。1911年革命に参加した内モンゴル人が経験した疎外感よりもさらに深刻な疎外感をリンチノは味わったはずだ。

このような中で彼の目は、だんだんと中国に向けられ始めていた。ブリヤート＝モンゴル自

治共和国建国、モンゴル人民共和国建国の仕事をやりとげたのち、リンチノの次の目標は内モンゴル人の解放だった。

第3回党大会中の演説（1924年8月26日）の中で、彼はすでに「中国の抑圧者からモンゴル民族を解放する事業を中国の革命家たちと共同して行うため、彼らと同盟を結びに中国へ行く用意がある」と述べている⁷¹⁾。

首相ツェレンドルジの1924年12月15日の日記には「ユーディン [ソ連大使館第1書記] がきて、リンチノを北京に派遣するとよいというチチェーリンの意向が伝えられてきた、と述べた」という記述がある⁷²⁾。翌1925年1月12日の日記によれば、ユーディンの「北京へ非公式の代表を送る件はどうなっているのか」との問いに対し、ツェレンドルジは「リンチノを派遣することになった。その時期については、事前にカラハンと協議してほしい」と答えている⁷³⁾。

リンチノはスターリン／チチェーリンあての書簡の中でも、チチェーリンの意向に言及しつつ、北京行の希望をやや屈折した書き方でくり返している⁷⁴⁾。

これらの情報を総合してみると、一時、リンチノの中国行がかなり具体的に検討されていたことがわかる。おそらくはモンゴル統一という彼の考え方がコミンテルンによって批判され、彼の中国行は実現しなかったが、リンチノの思想と行動の一貫性を考える場合、この中国行の願望は重要な意味をもつと思われる。

リンチノとリスクロフの対立は、この2年後に問題となる、ダムバドルジ指導部と党内左派、ダムバドルジとコミンテルン代表の対立と多くの共通点をもつ。リンチノと同様、ダムバドルジは、いったんはコミンテルン代表を退けるのに成功するが、最後にはやはりモスクワへ送られてしまう⁷⁵⁾。

このようにみると、リンチノを“コミンテルンの手先”と呼ぶような一面的な見方は、ほとんど意味をもたないことがわかる。リンチノはコミンテルンやコミンテルン代表の指示に盲目的に従ったのではなく、時には抵抗して、自分の思想を守り通した。

註

- 1) Diluv 1982, p. 122.
- 2) 『モンゴル史』, 81頁.
- 3) ルーペンはリンチノがコミンテルン代表、軍事革命会議議長として、1921～25年に「外モンゴルの事実上の独裁者」だったと述べている (Rupen 1961, p. 236)。しかし本稿の中で述べるように、彼を単純に「コミンテルンの代表」とみることはいできない。またルーペンがリンチノの追放を1928年としているのも誤りである。
- 4) Ринчино 1994, с.128.
- 5) Там же, с.196.
- 6) Там же, с.10-11.
- 7) Демидов 1983, с.114.

- 8) Сажинов 1989, с.114-115.
- 9) 1916年刊のこの書物は、日本では東京の東洋文庫に所蔵されている。
- 10) Ринчино 1994, с.11.
- 11) Очиров/Раднаев 1991, с.29.
- 12) Ринчино 1994, с.129.
- 13) Там же, 1994. с.129. Линчиноの記述はヤキーモフの証言と一致する。Якимов 1971, с.61.
- 14) БНМАУ-ын АИХ, 281 тал.
- 15) [Ринчино], с. 15-16, 39-40. この未刊行の資料は、ウランウデの Б.Д.Цибииков 氏の御好意により利用が可能になった。
- 16) 二木 1994, 91頁.
- 17) Ринчино 1994, с.131.
- 18) [Ринчино], с.37.
- 19) Dorson 1928, pp.80-82. なお『発端と成就』が、5名の派遣の決定は、2人の到着より前になされたように書いている (МАÜQ, pp. 106-107) のは、誤りと考える。
- 20) [Ринчино], с.37
- 21) Жамбарон (Сандагдолж) の名前は、「バラムソーの回想」からのみ確認される。Balamsu 1928, p. 106.
- 22) [Ринчино], с.38.
- 23) Очиров/Раднаев 1991, с.37.
- 24) 二木 1994, 101頁.
- 25) Ринчино 1994, с.131.
- 26) Там же.
- 27) Даш 1967, 93 тал.
- 28) Ринчино 1994, с.132.
- 29) Там же, с.192.
- 30) 『モンゴル人民党 (MAN)』誌第3号 (1924年) の巻頭には「モンゴル人民政府顧問兼全軍評議会議長エルバグドルジ」の肖像がおかれ、中程には「人民党中央委員長 [ヤпон] ダンザン」の肖像が挿入されている。次の第4号 (同年) にはレーニンとトロツキーの肖像がみられる。
- 31) Oyidob/Čečengbiligtü 1926, pp.33-35. オイドブはジャグムバの、ЧеЧенБиліктüはボヤンネメフのペンネームである。この稀観本は、ジャグムバの娘ナラン氏の御好意により、利用が可能になった。
- 32) Ibid., p. 35.
- 33) Ibid., p. 36.
- 34) Бат-Очир 1989, 78 тал.
- 35) Oyidob/Čečengbiligtü 1926, p.38.
- 36) Ibid., pp. 60-61.
- 37) Ibid., p. 61.
- 38) Ичиноров/Дашням 1989, 69 тал.
- 39) МАН-ын II ИХ,143 тал.
- 40) УТТА, 1-1-322, p.15.
- 41) МАН-ын III ИХ, 220-221 тал.
- 42) Temürganudi 1924, pp.38, 40. Тумулгалдиは、リンチノのペンネームの一つである。
- 43) БНМАУ-ын АИХ, 267 тал.
- 44) Мөн тэнд, 279 тал.
- 45) Рыскулов 1925.

- 46) Ринчино 1994, с.142.
- 47) МАН-ын III ИХ, 165 тал.
- 48) Ринчино 1994, с.131,133.
- 49) Сталкофは、もともとは青年共産主義インターナショナルの代表だが、コミンテルンをも代表したことが、諸資料から確認される。
- 50) Ринчино 1994, с.137.
- 51) Там же, с.138.
- 52) Там же, с.141.
- 53) Там же, с.143.
- 54) ANBQT, pp, 27, 49.
- 55) Шойжелов 1925, с. 208-209.
- 56) 二木 1984, 376頁.
- 57) ТБ, No.3 (1994), 23 тал.
- 58) ТБ, No.1 (1994), 44 тал.
- 59) ツェンドルジの日記 (УТТА). この資料は С.Идшинноров 氏の御好意で利用が可能となった。
- 60) ニキーフォロフの日記, 1926年1月10日. ЗГМ, 1994.3.18.
- 61) ТБ, No.1 (1994), 45-46 тал.
- 62) МАХН-ын IV ИХ, 233 тал.
- 63) Линчиноの旅費の決裁の文書(УТТА,1-2-9, p.23)の日付は7月23日である。また政府の文書へのリンチノの署名は、7月25日までは確認できるが、7月28日からは代理の者が署名している(УТТА, 1-2-58, p.48).
- 64) Ринчино 1994, с.198-199.
- 65) Гангааням 1991, 118 тал.
- 66) ТБ, No.3 (1994), 28 тал.
- 67) 二木 1984, 377頁.
- 68) 当時, クートヴェの学長はシュミヤツキーであった。
- 69) Очиров/Раднаев 1991, с.23, 39-40.
- 70) Ринчино 1994, с.128.
- 71) МАН-ын III ИХ, 134 тал.
- 72) АЭ, 1990.8.23.
- 73) Мөн тэнд.
- 74) Ринчино 1994, с.139.
- 75) 二木 1991.

文 献 一 覧

АЭ : 《Ардын эрх》

Бат-Очир 1989 : Л.Бат-Очир. Анхны долооны нэг. 《Намын амьдрал》 1989 No.7.

БНМАУ-ын АИХ : Бүгд Найрамдах Монгол Ард Улсын Анхдугаар Их Хурал. УБ. 1984.

Гангааням 1991 : С.Гангааням. Монгол ардын хувьсгалт цэргийн дээд удирдлага : цаг үе, хүмүүс (1921-1940).

《Монгол цэргийн уламжлал, хөгжил》. УБ. 1991.

Даш 1967 : Д. Даш. Монгол түмний төлөө зүтгэсэн анд нөхөд. УБ. 1967.

Демидов 1983 : В.А.Демидов. Октябрь и национальный вопрос в Сибири. 1917-1923 гг. Издание второе, дополненное. Новосибирск. 1983.

ЗГМ : 《Засгийн Газрын мэдээ》

Ичинноров/Дашням 1989 : С.Ичинноров, Г.Дашням. Түүхийн лавлах. 《Намын амьдрал》 1989 No.3.

- МАН-ын II ИХ : Монгол Ардын Намын Хоёрдугаар Их Хурал. УБ. 1974.
- МАН-ын III ИХ : Монгол Ардын Намын Гуравдугаар Их Хурал. УБ. 1966.
- МАХН-ын IV ИХ : Монгол Ардын Хувьсгалт Намын Дөрөвдүгээр Их Хурал. УБ. 1978.
- Очиров/Раднаев 1991 : С.Б.Очиров, Д.-Н.Т.Раднаев. Э.-Д.Ринчино — размышления о жизни и последних днях. 《Неизвестные страницы истории Бурятии (Из архивов КГБ)》 Вып. 1. Улан-Удэ.1991.
- Ринчино 1994 : Эдбек-Доржи Ринчино. Документы, статьи, письма. Улан-Удэ.1994.
- [Ринчино] : [Э.Д.Ринчино] К истории панмонгольского движения и роли в нем Д.Ринчино. [未刊行]
- Рыскулов 1925 : Т.Р.Рыскулов. Великий хуралдан Монголии. 《Новый Восток》 No. 8-9 (1925).
- Сажинов 1989 : Ж.Сажинов. Ерээдүй замынь үшөө л мэдэгдээгүй байгаа. 《Байгал》 1989 No. 6. ТБ : 《Түүх-баримт》
- УТТА : Улсын Түүхийн Төв Архив.
- Шойжелов 1925 : С.Шойжелов. Переломный момент в истории национально-освободительного движения Монголии. 《Новый Восток》 No.10-11 (1925).
- Якимов 1971 : А.Т.Якимов. Братство по оружию. 《Книга братства》 Москва.1971.
- ANBQT: *Arad-un Nam-un Biigüde Qural-un toytaḡal*, Ulaḡanbaḡatur, 1925. 4.
- Balamsu 1928: Balamsu, “Nam-un angqaduyar yeke qural-i quralduqu ḡay üyes-ün bayidal-un tuḡai,” (*Mongḡol Arad-un Qubisqaltu Nam-un Töb Qoriy-a, Mongḡol Arad-un Qubisqaltu Nam-un teüke-dür qolboydal бүкii жүil-üd*, Ulaḡanbaḡatur, 1928)
- Diluv 1982: Owen Lattimore and Fujiko Isono, *The Diluv Khutagt, Memoirs and Autobiography of a Mongol Buddhist Reincarnation in Religion and Revolution*, Wiesbaden, 1982.
- Doḡsom 1928: Doḡsom, “Mongḡol Arad-un Nam-un angq-a egüstigen tuḡai yabudal,” (*Mongḡol Arad-un Qubisqaltu Nam-un Töb Qoriy-a, Mongḡol Arad-un Qubisqaltu Nam-un teüke-dür qolboydal бүкii жүil-üd*, Ulaḡanbaḡatur, 1928) [「ドクソムの回想」]
- MAN: *Mongḡol Arad-un Nam*.
- MAÜQ: Čoyibalsang, Losol, Demid, *Mongḡol arad-un iündüsün-ü qubisqal-un angq-a egüsčii bayiyuluydaysan tobči teüke, Degedü debter*, Ulaḡanbaḡatur, 1934. [「発端と成就」]
- Oyidob/Čečengbiligtü 1926: Oyidob, Čečengbiligtü, *Mongḡol-un Qubisqaltu Jalayučud-un Eblel-ün teüke-dür qolboydaqu жүil-üd*, Ulaḡanbaḡatur, 1926.
- Rupen 1961: Robert A. Rupen, *Mongols of the Twentieth Century, Part 1*, The Hague, 1964.
- Temürgarudi 1924: Temürgarudi, *Mongḡol-un qubisqal-un iregedüi ḡay-un bayidal tölöb*, Neyis-lel Küriy-e, 1924.
- 二木 1984 : 二木博史「ダムバドルジ政権の内モンゴル革命援助」『一橋論叢』92-3 (1984年)
- 二木 1991 : 二木博史「ダムバドルジ政権の敗北」『東京外国語大学論集』42 (1991年)
- 二木 1994 : 二木博史「モンゴル人民党成立史の再検討——「ドクソムの回想」を中心に——」『東京外国語大学論集』49 (1994年)
- 『モンゴル史』: モンゴル科学アカデミー歴史研究所編著, 二木博史/今泉博/岡田和行訳『モンゴル史』1 (恒文社, 1988年)

Ринчино ба Монголын хувьсгал

ФҮТАКИ Хироши

1911 оны хувьсгалыг Ар монголчууд Өвөр монголчууд хамтран бүтээсэн гэж үзэх юм бол 1921 оны хувьсгалыг Халх монголчууд Буриад монголчуудын хамтын бүтээл гэж хэлж болно. 1911 онд Хайсан гүн Өвөр монголчуудын төлөөлөгч байсан бол 1921 онд Элбэгдорж Ринчино Буриад монголчуудыг төлөөлжээ.

Ринчино 1920 онд монголын асуудал хариуцах байгууллага байгуулах саналыг Я. Янсонд тавьжээ. Энэ саналын дагуу Эрхүүд Азийн Товчоо байгуулагджээ. Азийн Товчоо нь 1920 оны зун Оросын Коммунист Намын Сибирийн Товчооны Дорно дахины улс түмний секц болж, түүний дэвсгэр дээр 1921 оны 1-р сард Коминтерний Алс Дорнодын нарийн бичгийн дарга нарын газар бий болжээ.

С.Данзантай хамт Москвад явсан Ринчино Зөвлөлт Орос улсаас тусламж олоход чухал үүрэг гүйцэтгэжээ. Мөн Ринчино барон Унгерн зэрэг цагаантныг устгах төлөвлөгөө хийхэд гар бие оролцжээ.

Ринчино бол С.Данзан, Д.Бодоо хоёрын нэгэн адил 1921 оны хувьсгалын гурван гол удирдагчдын нэг байжээ.

Ринчино, Бүгд Найрамдах Автономит Буриад Монгол Улс (1923), Бүгд Найрамдах Монгол Ард Улсыг байгуулсны (1924) дараа Өвөр монголчуудыг чөлөөлөх тэмцэлд оролцохоор бэлтгэж байгаад Коминтерний шийдвэрээр монголчуудын хувьсгалт үйл ажиллагаанаас зайлуулагджээ.